

Title	クリップ・レスリーの観たるジョン・スチュアート・ミル
Sub Title	
Author	榎本, 鈺治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.2 (1923. 2) ,p.294(136)- 304(146)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230201-0136

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

教は、第四世紀に於ては、既に國家の副壁となり其末葉に於ては國家的教會となつた。蓋し私有財産の制度と政府的政治とを認容して之に順應せる其代償と云ふ可きであるが、併し之と同時に共產主義的理想は其中より失せて修道院と異教徒との許に走り、其處に保存せられて、中世及び近世に於ける一切の背反毎に其頭を擡げたのであつて、彼の再浸禮論者の運動や英國の革命の如きは其著例をなすものなのである。何れにせよ此時以來基督教は共產主義的理想を追ひ求めずして、教義的及び哲學的信仰個條の討議に没頭するに至つたのであつて、多數者は沈黙し、神學者のみ其代辨者となつたのである。

(完)

クリッフ・レスリーの觀たるジョン・スチュアート・ミル

榎本 鑛 治

はしがき

Thomas Edward Cliffe Leslie は James Edwin Thorold Rogers, John Kelis Ingram 等と共に、英國に於ける歴史派經濟學者として著名である。私が以下解説する所は、彼の「經濟學論集」Essays in Political Economy, 2nd edit. 1888. 中に収録せられた一文である。同書に附された Ingram の Leslie 略傳に依れば、John Stuart Mill や Cliffe Leslie との交際は、Macmillan's Magazine 誌上に公された Leslie の處女論文

を見て Mill より求めたのに始まるのである。而して Mill は、Leslie の才能を賞揚し、彼との交際を喜び、彼を遇するに尊敬と深切さを以てした。是れは Leslie の常に感謝して居た所である云々。(Biographical Notice of the Author, in the Essays in Political Economy, P. X.) 併し Mill の自叙傳中には、Leslie について一言も費されて居ない。唯だ吾々は、Mill の「論集」第四卷 (Dissertations and Discussions, vol. IV, 1875.) 所收の Leslie の著書「愛蘭、英蘭、及び大陸諸國の土地制度と産業經濟」(Land Systems and Industrial Economy of Ireland, England, and Continental Countries, 1870.) に対する批評に於て、Mill の Leslie 觀を窺ふことが出来る丈で、兩者の交際に關する Mill の記述は、他にあるまいと思ふ。其批評中に於て Mill は、Leslie を以て、「應用經濟學に於ける

現存最大の著述家の一人」であるとした。(Diss. and Disc., IV. p. 86.) 尙ほ Leslie の Mill 論は、一八七五年六月五日の Academy 紙上に、Mill の「論集」第四卷に對する批評として現はれたものである。又以下二三の附註は、私が Leslie の論旨を明瞭ならしめるために加へたに過ぎない。

Mill の「論集」第四卷は、自叙傳中の所言を説明して居る。Mill は、自叙傳中に自己を叙述して、「自他の思想より等しく學ぼうと用意して常に前進しつゝあつた人間」であるとした。(Mill, Autobiography, 3rd edit., pp. 1-2) 歴史上に於て、例へば William Thomas Thornton の著「勞働に就て」(On Labour, 1869.) の論争に於ける Mill の如くに、自己の論旨を再査し、若し擁護し難きものとすれば之を抛棄し、又自

己の門下より様々の教を受けるために用意して居る哲學者の他例を、殆んど見たことがない。

他面に於て Mill の「論集」第四卷は、Mill の生得の力 (natural powers) が平價以上ではない、寧ろ夫れ以下であり、而して彼の卓越せることが「他の仕合せな事情中に於て Mill の早期に於ける訓練 (early training)」に基づくものであると云ふ自叙傳中の言説に於て、彼自身の智力に就て Mill の言明した所の他の批判に對する證據の連鎖に、幾個かの鏈環を加へるのである。(Mill, Autobiography, p. 30) Mill の早期に於ける訓練は、疑もなく彼の智的閱歷の上に顯著な影響を及ぼした、併し吾々の (Leslie の) 批判を以てすれば、Mill 自身が彼の、早期に於ける訓練」に歸する所と大いに異なるものがある。而も確かに之に關説しなければ、Mill の哲學體系も、彼の心意的才幹も適當に評價せられ所であらう。

併し最近に於ては——Mill の聲望に及ぼした政治的反動の非常なる影響を云ふのではない

——心意哲學並に社會哲學 (mental and social philosophy) に於ける Mill の研究方法が不適當であつたことは、普ねく是認されて居る。而して彼の經濟學は、今日殊に獨乙に於て概念の矛盾撞著と、不適當なる範圍とのために非難されるのである。Roscher 博士は、其著「獨乙經濟學史」(Geschichte der Nationalökonomik in Deutschland, 1874.) に於て曰く、「Mill の概案は、單に自若たる個人的利益の傾向の理論に過ぎぬけれど、彼は屢々斯く到達せられた理論的準則に對する實際的例外の存在と、他の力及び動機の出現とを是認して居る」と。英、米、獨に於ける其他の著述家は、Mill が勞銀基金說 (doctrine of the wagesfund) を嘗て採用し得た、

得るものではない。夫れは、「論集」第四卷中に開陳せられた彼の經濟學の或状態と關聯して特に考察せられなければならぬ。併し其影響に關する問題は、頗る廣汎なる意義を有するものである。夫れは、單に偉人と彼等の精力とを生ずる幾多の原因のみならず、又哲學と思想との一般進路を支配する幾多の原因に關する大なる一般問題の特殊的實例である。何故と言ふに Mill の著書は、何れも彼の生時に於て、文明諸國の大部分に依て理論的思辨並に實際的意見 (theoretical speculation and practical opinion) の主要なる主題に就て主張された所の各種觀念を決定するのに、多大の關係を有して居たからである。即ち Mill が、論理學、經濟學、及び政治學に就ては權威ある著述家として、且心理學、及び倫理學に就ては第一流の著述家として、各國に於て尊敬せられて居たと云ふことは、争はれぬ

とを驚いて居る。其研究の結果は、Mill の制度の缺陷は彼自身の心情か或は彼の教育かに其證據を求む可きであるか」と云ふのである。

二

一は、其事柄に於て明かである。教育は、大なる心意力 (mental powers) の應用を育成し、發達させ、又指導することが出来る。之と同時に教育は、心意力を誤導することも出来る。併し教育では、到底心意力を創造することが出来ない。而して何人と雖も、大なる各種の力を有せずして、Mill の如く或は「論理學體系」(A System of Logic, 1843.) 或は「經濟學原理」(Principles of Political Economy, 1848.) 或は「ハンミルトンの哲學批判」(An Examination of Sir William Hamilton's Philosophy, 1865.) 或は「論集」四卷に云ふが如く各種の著書を公刊することが出来る

るものではない。勿論「功利主義」(Utilitarianism, 1853)や「自由論」(On Liberty, 1859)等の小著に就ては云はぬ。

「論集」第一巻は、——何人も論理學者や經濟學者に於て殆んど見出さなかつた——詩的纖維(poetic fibre)をミルの心意組織中に存在して居ることを説明するのである。

(譯註) Leslieの指す「論集」第一巻には、三種の詩的論文が收められてゐる。即ち“Thoughts on Poetry and its Varieties”(Diss. and Disc. pp. 63-94)、“Writings of Alfred De Vigny”(op. cit., pp. 287-329)、“Coleridge”(op. cit., pp. 393-466.)の三文、是れである。

而して其他各種の論文は、若し Mill が歴史的研究(historical inquiry)に對する資質を缺いて居ると云ふ意味にて、Roscher 博士が「彼の心情は史的に非ず」と批評したとすれば、之を論駁する所がある。併し歴史的研究方法(historical method)が Mill の哲學に應用されて居る

所である。Leslieの所謂公務とは、Millの東印度會社に關係せることを指すのである。而して Mill は東印度會社の劇務に服して、「論理學体系」(A System of Logic, 1843)、「經濟學上の不定問題論集」(Essays on some unsettled Questions of Political Economy, 1844)及び「經濟學原理」(Principles of Political Economy with some of their applications to social philosophy, 1848)の三者を公にしたのみならず、雜誌に寄稿した論文も少なくない。以て如何に Mill が非凡卓越せるかを推測することが出来る。

其後 Mill は、議會に列席して主要なる討論家たる地位を占めた。

(譯註) Mill は、東印度會社在職中彼の愛蘭土問題に對する意見に共鳴した Lucas 及び Duffey 兩氏の首唱の下に、一度下院議員の候補者に擬せられたが、彼は固辭して之を受けなかつた。然るに其後一八六五年の改選に際して彼は、Westminster 選挙區に於ける自由黨員 James Baal の勸誘の下に立候補するに至つた。由來 Westminster 選挙區は、常に有名な人物を選出する所であつて、而も之を一種の誇りとして居た。従て此地より選出された人物には、政治家の Sir Francis Burdett も居るし、海將の Thomas Conchane Dundonald も居るし、Byron の親友 John Cam Hobhouse も居るし、陸將 Sir George de Lucy Evans

この稀有なのは、承認されなければならぬ。之に加ふるに、Mill の生涯に於ける盛時三十二年間は、公務に服して、第一流の行政的手腕を發揮し、而も有効に、且又智的思辯の各種部門に於ける第一流の著述家に伍して彼等に優越する時間を見出す程容易迅速に、公務を處理したのである。

(譯註) Mill は、一八二三年五月廿一日父 James Mill の盡力にて東印度會社(the East India Company, or House)の文書審査局書記補(junior clerk in the Examiner's Office)として入社した。其後漸次累進して、一八二八年には主席書記となつたが、一八五六年三月廿八日 Peacock 及び David Hill 兩氏の退社すると共に文書審査局長(Examiner)となつた。然るに幾何もなく一八五八年十二月廿五日東印度會社は政府に引繼がれることとなつたために彼は辭職した。Alexander Bain, J. S. Mill, a criticism, 1882, p. 31; J. S. Mill, Autobiography, 3rd edition, pp. 81-82, & p. 24 9; W. L. Courtney, Life and Writings of John Stuart Mill, 1888, pp. 46-47)尙ほ Mill が、東印度會社の政府直轄となるに反對して議會に請願書を提出したことは、人の知る

も居る。茲に於て當時經濟學者、政治學者、哲學者として第一流の人物たる Mill に白羽の矢が立てられた譯である。而して Mill は、右の推舉を受けるや、直ちに極めて率直な文書を公表した。其大要を示せば、(一)彼は個人的に代議士たることを希望するものに非ず、(二)彼は彼の所信に依り選挙運動もせざれば、又選挙費用も支出せず、(三)萬一當選するも、決して地方的利益のために奔走することを能はず、(四)宗教上の問題に就ては一言も答へざる可し、及び(五)婦人に參政権を賦與す可しとは彼の強固たる信條なりと云ふのである。而して彼は議會に於て概して、最も人氣のない問題を論じたが、彼の頭腦と時事に關する知識とのために、常に高評を得た。併し一八六八年の總選挙を迎へると共に Mill は、Westminster に於て再び立候補を宣言したが、不幸にも保守黨の領袖 W. H. Smith に敗北した。W. L. Courtney の云ふ所に依れば、Mill の落選した理由は、多分選挙區民が哲學者の代議士を好まなくなつたためであらう。彼は同年直ちに Avignon に隱退して、専ら著述に耽つた。因に Gladstone は、Mill の落選したことを聞いて大いに之を遺憾としたと云はれる。其他 Mill の政治的活動の詳細は、W. L. Courtney, John Stuart Mill, pp. 143-159; J. S. Mill, Autobiography, pp. 279-312; A. Bain, J. S. Mill, pp. 124-125, & p. 129 等を參照せらるべし。

尙ほ最近 Mill の自叙傳の邦譯が、石田憲次、今泉浦治郎
兩文學士の筆に成つたものが公刊せられたけれど、私はま
だ一讀すらしないのを遺憾とする。

三

總て是等の事を果した人(Mill)が、私的交際
に於て示したのは、際立つて居る會話力であり、
會得と答辯との迅速なることであり、雅致ある
諧謔の調子を含んだ諷言談の巧妙さであり、
而して彼の會話が眞面目の時ですら現在の著者
(Cliffe Leslie)は、屢々「彼の明晰なる談話は頓
智と同様の愉快さを他人に與へた」との Sir
Andrew Freethport に關する Steel の記述を思
起させられた程に巧妙強調なる會話である。

併し若し Mill の「早期に於ける訓練」が、彼
の智的優越さを少しも説明しないとすれば、夫
れは正しく彼の哲學を構成するのに大なる効果
があつた。然るに彼の父 James Mill が彼に服
從させた特異の心意的訓練より以上に多くの事

したのである。是等の人々は、通常「哲學的急進主義者」
(the Philosophical Radicals)と呼ばれる團體に屬して居た。

如何なる思想の指導者と雖も、未だ嘗て此著
名なる一閉程に彼等自身の體系に無限の信頼を
措いたことはない。而も是等の一團には、人間
の科學に於ける總ての問題の鍵關を握つて居る
と思へたのである。即ち心理學に於ける自在合
鍵は、所謂觀念の聯合、或は聯想 (association
of ideas) であり、倫理學に於ける自在合鍵は、
快樂と苦痛との平衡 (balance of pleasures and
pains) に依て確定される效用 (utility) であり、
政治哲學に於ける自在合鍵は、代議政治と結合
された效用であり、經濟學に於ける自在合鍵は、
金銭的利己心 (pecuniary self-interest) と人口の
原理 (principle of population) とであり、法律學
に於ける自在合鍵は、法律の特殊的定義と權利
の分類とであつた。總て是等の方法を「John

が、其「早期に於ける訓練」中に包含せられなけ
ればならない。即ち吾々は、Mill が彼の教育を
受けた時代に於ける主要の智者の根本概念、及
び研究方法を其中に含めなければならぬ。
Mill 修學の時代は、Jeremy Bentham が正に第
一流の社會哲學者と看做されたのである。David
Ricardo は、彼の抽象的なこと、及び早急的
概括に對する Thomas Robert Malthus の反對
があつたにも拘はらず、正しくとまでは行かぬ
が兎に角經濟學に於ける最高の權威と看做され
Mill の父 James Mill は、政治思想家兼著述家
としては最も優秀なる人物、又心理學者として
は主要人物の一人と認められ、John Austin は、
法律學に於ける衆知の人物と看做されて居たの
である。

(譯註) 右記の人々、及び John Stuart Mill, George Grote,
Alexander Bain 等は、政治思想家としては、殆んど總て哲
學的基本の上に立つて、自由主義的手段方法を熱心に主張

Stuart Mill は、毫も他に凌駕されざる力を以て
應用したのである。

之に加ふるに彼は、快く論理學體系を打建て
た。勿論 Mill の論理學體系は、將來に於て是
正改良せられるかも知れないが、併し彼の著書
(A System of Logic) は、常に人心の主要なる
著書の中に置かれるであらう。

若し進化の學説が、Mill の心理學及び社會科
學に於て如何なる地位をも見出せないことすれ
ば、夫れは彼の時代と彼の教育との缺點であ
り、若し歴史的研究方法が經濟學原理の序論
(Preliminary Remarks) に於けるが如く、彼の「經
濟學」に採用されたとしても、夫れは唯だ除外
せらる可きであり、而して若し觀察に基いて訂
正す可きこと、及び演繹的推理よりの推論の事
實が、經濟學原理及び「論集」第四卷に於て抽象
的理論に對する實際的除外例、即ち「經濟科學」

の「應用」てう形式を以てのみ現はれるならば、眞に其缺點は、「經濟科學」其物の本原的概念 (original conception) に存するものである。

Ricardo の抽象説と經濟現象を支配する現實の力を鞏固なる科學的體系に組立てることとは不可能であつた。若くは人類社會の全史を研究せずして、人類の諸觀念の起源と發達とに關する適切な理論を興へることは、不可能であつた。併し若し何人かが、特に Stuart Mill の體系の失敗に對して非難する可きものであるとすれば、夫れは John Stuart Mill 其人には非ずして、彼の父 James Mill である。抑も總ての獨創を紛碎すると同時に、採用された幾多の方法に過度の信頼を感得せしめるやうに、慎重に適應された訓練が今迄にあつたとすれば、夫れは正しく Stuart Mill が彼の父より受けた訓練を指すのである。

四

更に John Stuart Mill が、演繹的經濟學に頗る感服したのは、より偏狹なる、又より淺薄なる人々に演繹的經濟學を推舉した所の、簡單さと均齊さとのためではなくして、夫れが推定する所の完全なる個人的自由のためであると云ふことも、記憶せられなければならぬ。然らば Mill は、總ての場合に最上の經濟を確保するたに如何なる程度に迄個人的利己心に信頼しなかつたかと云ふことを知るには、一般的には自由貿易論を、又特殊的には「教育は需要と供給とに委せられなければならぬ」てう學說に關する「論集」第四卷所收の「各種の補助金に就て」(on Endowments)の敘述を讀めば充分である。

他の經濟學的方面、即ち價值に對する需要と供給との作用は、William Thomas Thornton の On Labour, its wrongful Claims, and rightful

Dues, 1859. に關する論文中に極めて巧妙に論述されて居る。一國の勞働者の數に對する勞銀基金の比例が勞働の價格(勞銀)を決定すと云ふ所謂勞銀基金説は、如上の論文に於て拋棄された。而も此勞銀基金説が Mill の獨創に成つたものではなくして、彼の先人、即ち John Ramsay McCulloch 及び Nassau William Senior の著書中に、最も讓歩せざる、又不條理なる形式に於て現はれて居たことは、注目す可きである。洵に勞銀基金説は、利潤の平均率及び勞銀の平均率の學說に對する必至的歸結である。

若し或職業又は或場所に於て、他の職業又は他の場所に於けるよりも、利潤が高いか、若くは勞銀が低いかと云ふことが、あり得ぬとすれば、其處には實際に資本の可動性と、何處に於ても勞銀が支拂はれる所の勞銀の間に於ける連絡とが、あるであらうからして、如上の資本と

基金とを以て、勞働の價格(勞銀)の依存する一般基金を構成するものと看做すことは、甚だしく不正確ではないであらう。併し其場合と雖も、勞働者の團結は、自由競争の時よりも勞銀の平均率を高くし、又利潤の平均率を低くするかも知れない。

Mill と Thornton も吾々に充分知らせないやうに思はれるのは、特殊の場合に勞銀を引上げ可き勞働組合の主要なる力が、利潤と勞銀との現實的不平等より生じたこと云ふこと、是れである。一體或營業に於て法外の利得がある場合には、勞働者は、合同した行動に依て、自由競争が彼等に割宛てない所の分前を強請することが出来るのである。而して更に勞銀が非常に低い場合には、勞働者は同様に値上を強請することが出来るのである。

五

「論集」第四卷所收の土地問題に關する論文、及び土地改良に關する論文の説明する所は、MIIIが、其執筆當時に於ける各政黨所屬の多數人士と同様に、現在の土地制度の側に於ける勢力の強さを輕視したと云ふことである。而して同様の言は、移して以て Sir Henry Maine の「村落共同團體」(The Village Communities)の批評に於ける或語句にも適用することが出来る。Maine の著書は、非常な興味と歎賞とのため特殊の注意を受けるに足るものであつて、夫れは、MIII自身よりも遙かに保守的傾向と深き關係のある場合である。MIIIが天才と博學との著書を祕かに求めて居たと云ふことが説明する所の興味であり、又歎賞である。

Bishop George Berkeley の著書に關する論文は、心理學的批判の斷片として、頗る眞正價値ある以外に、又 MIII の見解に大いに反對せる

新刊紹介

Arthur J. Penty: Post-Industrialism.

pp. 154. Price. 6/- George Allen & Unwin, Ltd.

産業革命以來の社會は機械の社會であり、物質の社會である。すべての社會現象は機械による生産力によつて制約せらるゝに至つたのである。營利をその本則とする近世經濟組織中に生存し、一度經濟學祖アダム・スミスによつて分勞の利益を教へられた經濟學者は、機械と分勞との世界を讚美する。そは能率の社會であり、數量的社會である。生産費の低廉と産出財貨の數量的増加、さうしてこれに伴ふ自由競争とは、過去並びに現在における幾多の經濟學者の黄金世界である。

この自由競争を基礎とする社會、生産費の低廉と財貨の數量的増加を目的とする、換言すれば貨幣價值増殖を目的とする生産に對して、倫理と藝術の立場から批判、攻撃した人士は少なしとしない。英國のুক্তトリア時代は英國の「社

宗教的見解と深き關係のある天才に示した同情を以て目立つて居る。

「論集」第四卷は、其他有益なる論文以外に、George Grote の「アリストートル論」の批評を載せて居るが、評者 MIII に對しては多數の人が斯る主題に對する批評として傾聴せらる可き最高の要求あることを否定しないであらうし、又多數の人は、彼のために論理學の創設者の最も著名なる後繼者の間に Sir Francis Bacon の並んで一の地位を指定するであらう。(Essays in Political Economy, 1888, pp. 54-59.)

會的進歩の最高潮に達した時とせられてゐる。この時代にあつて哲人トマス・カアライルはその倫理的見地からマンチエスタア學派の自由主義とその實際を攻撃した。カアライルにおいて、その優秀なる師を見出したジョン・ラスキンは倫理と藝術の立場から中世紀的精神の復活を主張した。ジョン・ラスキンが藝術批評家から社會批評家となつたのに對して、身自ら藝術家であつたウキリアム・モリスは、その藝術の立場から現代の物質文明の野卑を攻撃して、共產主義の陣營に走つた。彼等の立場は、他の社會主義者が社會問題の起因を胃の腑の問題と解するのに對して、それを倫理の問題であり、藝術の關するところであるとした。彼等の主張は共鳴を得ることが比較的少なかつた。藝術的運動である Art and Craftsmovement (モリスはこの運動に參加す)は工藝において中世紀的傳統を復活せしめんとした運動であつた。さうしてこの運動の失敗と共に起つたギルド思想(千九百六年)は正にラスキン、モリスの傳統を受けたものである。